

おすすめの図書・映像作品

For you
もっと本を！ もっと映画を！



西宮市

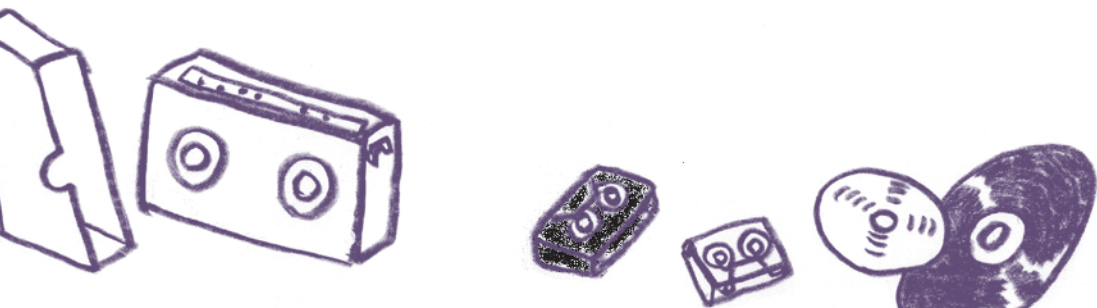
友だちと会えない時間には本を！ 映画を！

なんとなく出会った作品に「力」をもらえたら、嬉しい？ お得？
幸せ？ ちょっと重い？

「情報は力だ」と信じて、今号はウェブにかかわってくださったことのある方々に「おすすめの作品」を紹介していただきました。

うーん、そうだったのか…。ふーん、でもなあ…。そうよね。そうかな。などいろいろな感想をもっていただけたら幸いです。

① 寝て、起きて、ご飯を食べるように本を読んだり。トイレに行ったり、お風呂に入ったり、窓を開けるように映画を観たり。そういう日常に「男女共同参画センターの資料」があって、なんかもやもやしたり、ざわついたときに思い出していただけるとお役に立てる（はず！）男女共同参画センターです。



2000年にオープンした西宮市男女共同参画センターウェーブは20年を迎えました。いつもはたくさんの人が集い交流する場になっているウェーブですが、2020年は新型コロナウイルスの影響により、いつもの風景は変わらざるを得ませんでした。

そのような中でも、本や映画はいつでもだれでも迎え入れてくれるから、もっと本を！ もっと映画を！
集い交流できる日を待ちわびながら。





女の生きづらさを乗り越えるには

雨宮処凛 (作家・活動家)

2000年自伝的エッセーで作家デビューして以来、若者の生きづらさについての著作を発表している。また、生活も職も心も不安定さを強いられる人々「プレカリアート」問題に取り組んでいる。

著書『「女子」という呪い』集英社、『生き地獄天国』太田出版、『ドキュメント 雨宮☆革命』創出版、『反撃カルチャー プレカリアートの豊かな世界』角川学芸出版、『相模原事件・裁判傍聴記』太田出版／共著『ポストコロナ期を生きるきみたちへ』晶文社など多数。

2020年9月、アメリカのタイム誌が「世界でもっとも影響力のある100人」の一人に伊藤詩織さんを選んだ。日本人で選ばれたのは、人種差別に抗議した女子テニスの大坂なおみ選手と伊藤詩織さんの二人。

3 伊藤さんは17年、性暴力を受けたことを公表。日本で「#Me Too」運動が広がる大きなきっかけとなった。しかし、そんな詩織さんにつきまとったのはバッシングという名のセカンドレイプ。詩織さんがタイム誌の100人に選ばれた3日後には、国会議員が女性への暴力や性犯罪に対し「女性はいくらでもぞをつけますから」と発言したことが報じられ、大きな批判を浴びた。

ここで紹介したいのは、時に性暴力に晒され、時に「女だから」という理由で下に見られ、かと思えば「ジェンダーバランスとらないと最近うるさいからさ」なんて理由で「女の頭数」として駆り出される、そんな女性の生きづらさに「効く」書籍たちだ。

まず大推薦したいのが、ナイジェリア出身の女性作家、チママンダ・ンゴズィ・アディーチェの『男も女もみんなフェミニスト

でなきゃ』(くぼたのぞみ訳／河出書房新社)。

彼女は世界中の女子が小さなころから投げかけられる呪いの言葉を以下のように紹介する。

「野心はもってもいいけれど、もちすぎではいけません。成功するのを目指さなければいけないけれど、成功しすぎではいけません。そうしないと男性に対して脅威になってしまいます。男性との関係であなたのほうが収入が多くなっても、そうでないふりをする、とくに人前ではそうしなければいけません。そうしないとその男性を去勢してしまいます」

誰しもが、身に覚えがある感覚だと思う。「頑張れ」「努力しろ」と言われながらも耳元で囁かれる「でも、男以上に成功するな」という言葉。絶え間なく注がれるダブルスタンダードなメッセージ。著者は自身の具体的なエピソードから、私たちに問う。

子どものころ、テストで最高点をとったらなれると言われていた学級委員。晴れて最高点をとったものの、学級委員になれるのは男子だけと知ったときの違和感。大人になって駐車係に自らチップを渡しても、なぜかお礼を言われるのは自分ではなく一緒にいる男性という不思議。入店時にウェイターが女



性の自分は無視して男性客にだけ挨拶をするレストラン。

本書は、彼女が「TED*」で行ったスピーチに加筆し書籍化したものだ。スピーチの様子は動画サイトで瞬く間に拡散され、人気ミュージシャンのピョンセはスピーチの一部を取り入れた曲『***Flawless』を発表。クリスチャンディオールは「WE SHOULD ALL BE FEMINIST」というロゴ入りのTシャツを作って17年春夏パリ・コレクションでモデルに着せ、またスウェーデン政府はこのスピーチを冊子にして16歳の子どもたち全員に配布した。

ナイジェリアの女性が、日本に住む私と変わらない違和感を抱えていたこと。そしてそれが世界中の女性たちに共感を呼んだこと。なんだ、このもやもやって、世界共通のものだったんだ。そう思うと、なんだが勇気が湧いてこないだろうか。同時に、男社会の盤石さに、改めてため息もこみ上げる。この本は、世界27カ国で翻訳出版されている。

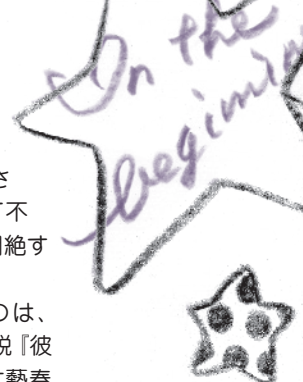
次に紹介するのも海外の本だ。それはお隣・韓国の『82年生まれ、キム・ジヨン』（チョ・ナムジュ著／斎藤真理子訳／筑摩書房）。韓国で16年に出版され、100万部を超えるベストセラーとなった本書は、30代の子育て中の主人公、キム・ジヨンの半生を淡々と綴っている。しかし、淡々とした記述の中に、女性であれば誰しものが身に覚えのあるだろう「あるある!!」が、いたるところに仕込まれている。男兄弟との格差。学校に入ると突きつけられる「男子」が優遇される世界。10代になると男子生徒につきまとわれ、被害を訴えたと「スカートが短い」などと説教され、露出狂を取り押さえれば「女の子が恥ずかしげもなく」と責められる。就職を前にすると、「呪い」はさらに強烈になっていく。その後も結婚、親戚付き合い、出産、退職、育児とさらに「女地獄」はパリエーション

を増していく。大小さまざまな理不尽、そして不条理に、「わかる!」と悶絶すること間違いなしだ。

最後に紹介したいのは、姫野カオルコさんの小説『彼女は頭が悪いから』（文藝春秋）。

16年に起きた、東大生5人による集団強制わいせつ事件に着想を得た小説だ。エリート学生らの選民意識と、のちに被害者となる女子大学生のひたむきで淡い恋心のコントラストが痛ましい。そして事件が起きた後、「東大生の未来を潰した勘違い女」とバッシングされる女子学生。発売直後、夢中で読んだことを覚えている。「小説にしかできないこと」が、まさにここにある。

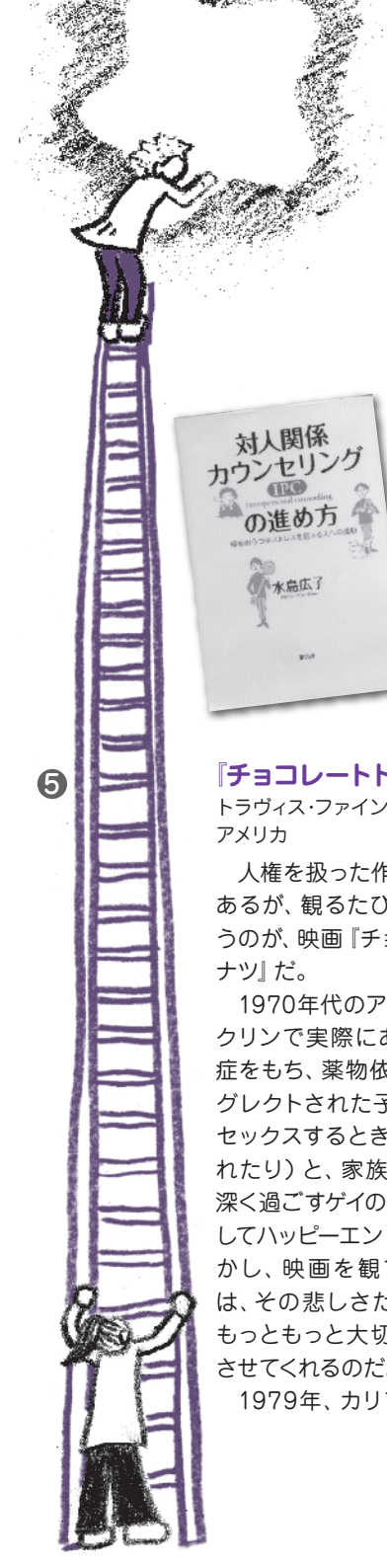
「女の生きづらさ」を乗り越えるには、「共感」がもっとも効くようである。



※TED: Technology Entertainment Designの略。副題はideas worth spreading (広める価値のあるアイデアたち)。ニューヨークに本部があり、毎年バンクーバーで大規模な世界的講演会を主催する非営利団体。

1984年に始り、学術・エンターテインメント・デザインなどさまざまな分野の人がプレゼンテーションを行なう。最重要事項はアイデアであり、ゲストスピーカーには無名人物も多く選ばれるが、クリントン元大統領、ビル・ゲイツ、ノーベル賞受賞者ジェームズ・ワトソンなど、各界を代表する人も多い。

参考: コトバンク <https://kotobank.jp/word/TED-191078>



血はつながらなくても、 法が許さなくても、 奇跡的に出会い深い愛情で 結ばれた3人のお話

水島広子（精神科専門医）

対人関係療法専門クリニック院長。アティテューディナル・ヒーリング・ジャパン（AHJ）代表。心の健康のための講演や執筆も多い。

著書『自分でできる対人関係療法』創元社、『「他人の目」が気になる人へ』光文社知恵の森文庫、『自己肯定感、持っていますか?』大和出版、『10代のうちを知っておきたい折れない心の作り方』紀伊國屋書店、『50代からの人間関係』PHP研究所、『つい、「まわりに合わせすぎ」てしまう人へ』三笠書房など多数。



⑤ 『チョコレートドーナツ』

トラヴィス・ファイン監督／2012／アメリカ

人権を扱った作品はいろいろあるが、観るたびに泣いてしまうのが、映画『チョコレートドーナツ』だ。

1970年代のアメリカ、ブルックリンで実際にあった「ダウン症をもち、薬物依存の母親にネグレクトされた子ども（母親がセックスするときは廊下に出されたり）と、家族のように愛情深く過ごすゲイの話」である。決してハッピーエンドではない。しかし、映画を観て涙を流すのは、その悲しさだけではない。もっともっと大切な何かを感じさせてくれるのだ。

1979年、カリフォルニア。私

が11歳のころの話だ。まだゲイの存在も知らなかった年頃である。

主人公の一人、ゲイのルディはシンガーを夢見ながらもドラッグクイーン（女性の姿で行うパフォーマンスの一種。ドラッグクイーンには男性の同性愛者や両性愛者が圧倒的に多い。しかし近年では男性の異性愛者や女性がこれを行うこともある）。実際、ルディが魅力的！ 歌手を夢見ながら、ショーパブでパフォーマーとして暮らしている。立場上、ロパクだがショーダンサーで日銭を稼いで経済的にはギリギリでも自分に正直に生きるルディ（私が大好きなアラン・カミングが演じている）。奔放だが、その情の深さは感動的である。

もう一人の主人公、ポール。検事局に勤める検事である。正義を信じながらも、ゲイであることを隠して生きている。しかし、ショーパブでルディに惚れてしまい、ルディもイケメンのポールに惚れてしまう。結局ゲ

イであることが上司にはれて検事局を解雇され、ポールは弁護士に転身する。

ルディと同じアパートに住むダウン症の少年・マルコは、母親の愛情を受けずに育った。とても気持ちの優しい子である。

母親に捨てられたマルコを、情の深いルディは見捨てられず引き取る。ルディとポールの愛情も深まっていき、マルコとともに幸せな家庭を築き始める。経済的に余裕があるポールの部屋で、3人は暮らし始める。

二人の、マルコに対する愛情は、並大抵のものではない。学校の手続きをし、初めて友だちとともに学ぶマルコ。視力の問題に気づき、眼鏡を与える。宿題を懸命に手伝い、マルコの進歩を喜ぶ。私の心に刻まれているのは、ルディの、「マルコは望んでこういうふうに生まれたわけではない。その上になぜひどい扱いをされなければならないのか」という問題意識である。

ルディとポールの、マルコに対する愛情には本当に頭が下がる。実の親子であっても、こんなふうにできる人は少ないのではないだろうか。二人がマルコを否定したり叱ったりするシーンはまったくくない。「身体によいものを食べなければ」と主張するルディと、チョコレートドーナツが好きと言うマルコに「君はラッキーだね」とたまたま家にあったドーナツを与えるポール。とても嬉しそうに食べるマルコ。

同時に、ポールはルディのシンガーとしての才能を開花させたいと願う。ショーパブで口パクをするのではなく、本当の歌を歌わせたいのだ。ポールがルディのために購入した録音機でデモテープを作り、ナイトクラブへ送るルディ。封筒に詰めて愛情を込める作業を手伝うマルコ。夢は叶うかに見えた。しかし、幸福な時間は長くは続かなかった。ゲイであるがゆえに法と好奇の目にさらさ



発売元・販売元：ポニーキャニオン
(C)2012 FAMILIEFILM, LLC

れ、ルディとポールはマルコと引き離されてしまう。二人がマルコを大切に育てていたことは裁判で認められたが、わずか40年前のことなのに、ゲイに対する世間の目は本当に厳しい。どれほどの愛情をもって、どれほどの労力を費やして、マルコの幸せを願っているか。それなのに、単にゲイであることを理由に許されない、ということ、それは本当に理不尽で過酷なことだ。

血はつながらなくても、法が許さなくても、奇跡的に出会い深い愛情で結ばれる3人。見返りを求めず、ただ愛する人を守るために奮闘する彼らの姿に我々は本物の愛を見出す。

本作はモデルになった男性と同じアパートに住んでいたジョージ・アーサー・ブルームによってシナリオ化された。

2011年、トラヴィス・ファイン監督はこのシナリオを読み、崩れ落ちて涙を流したという。トラヴィス自身はゲイではない。だが、愛するわが子を奪われる苦しみに普遍性を感じたという。出会うこと、求めること、守ること、愛すること…ゲイもダウン症も関係なく、魂のレベルで求め合う愛はすべての人の心に届く。そして、『チョコレートドーナツ』は全米中の映画祭で上映され感動の渦に巻き込み、各地で観客賞を総ナメにするという快挙を成し遂げた。何度観ても涙が止まらない映画である。



ジェンダーを考える絵本。

ひこ・田中（児童文学作家）

『児童文学書評』主宰。1990年『お引越し』第1回椋鳩十児童文学賞受賞、1997年『ごめん』第44回産経児童出版文化賞JR賞受賞、ともに映画化。2017年『なりたて中学生』シリーズ第57回日本児童文学者協会賞受賞。

著書『レッツ』シリーズ 講談社、『モールランド・ストーリー』シリーズ 福音館書店、『大人のための児童文学講座』徳間書店、『ふしぎなふしぎな子どもの物語 なぜ成長を描かなくなったのか?』光文社新書、『ぼくは本を読んでいる。』講談社など多数。

『かみさまからのおくりもの』（ひぐちみちこ／こぐま社）を見てみましょう。赤ちゃんは一人ひとり、神様から贈り物をもらえると説明があります。さてどんな贈り物？「ほっぺの あかい」子には「よく わらう」。「おおきい」子には「ちからもち」。「ないている」子には「うたが すき」。「よく うごく」子には「よく たべる」。「すやすや ねている」子には「やさしい」。言葉だけではわかりませんが、絵を見ることで性別は女、男、女、男、女です。

初版が1984年で、2020年1月で109刷。このジェンダーバイアスのかかった絵本が今

でもよく読まれている事実、時代がまだまだ変わっていない証ではあります。

とはいえ、変化は起こっています。例えば、『どろんこのおともだち』（バーバラ・マクリントック作／福本友美子訳／ほるぷ出版）。シャーロットはおばさんから、人形をプレゼントされます。彼女は、人形遊びが嫌いで、どろんこ遊びが大好き。ダリアと名付けた人形を外に連れ出し

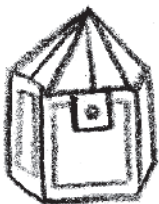
て遊びます。つまり、「女の子」然としたダリアを排斥するのではなく友だちにしてしまう。当然きれいなドレスはどろだらけ。家に来てきたおばさんにダリアを見せるシャーロット。おばさんは言います。「おみせのウインドウでこの子を見つけたとき、おもてでもっとおひさまにあたって、なかよしのおともだちと あそばなくちゃいけない、っておもったの」。おばさんは子ども時代にどろんこ遊びをしていたのに、ジェンダーに即した贈り物をしてしまったのです。シャーロットによって彼女は解放されたと言えるでしょう。

男社会を生き抜いた女性の伝記絵本もご紹介。

『発明家になった女の子マッティ』（エミリー・アーノルド・マッカーリー作／宮坂宏美訳／光村教育図書）は、19世紀に活躍した発明家マーガレット・E・ナイトを描いています。紙袋工場で働き出した彼女は、封筒型の袋しかできなかったので平底の袋を作る機械を設計します。が、同僚が彼女のアイデアを盗み、先に特許を取ってしまいます。

裁判を起こしますが、女性に機械の複雑なしくみが理解できるわけがないと、相手の男は主張します。マッティは自身が描いた図面や研究ノートを裁判官に提出し、見事に勝つのです。彼女が考案した平底のある紙袋を今も私たちは使っています。

7



もう一冊。『数字はわたしのことば ぜっ
たいにあきらめなかった数学者ソフィー・
ジェルマン』(シェリル・バードー文/バー
バラ・マクリントック絵/福本友美子訳/ほ
るぶ出版)。女の子が勉強するのは良くない
とされていた18世紀フランス。ソフィー・
ジェルマンは数学が大好き。独学で学び、男
性名で論文を投稿し始めます。やがて女性
であることが知られ、振動によって描かれ
る砂模様を数式化するコンテストで優勝し
ます。このときのソフィーの数式が元にな
り、現代の高層建築が立てられるように
なったのです。

こうした女性たちの伝記は、現代の女
の子たちを勇気づけるでしょう。

LGBTQをテーマにした作品も現れました。

『ふたりママの家で』(バトリシア・ポ
ラウコ絵・文/中川亜紀子訳/サウザンブ
ックス社)は、女性のカップルが黒人、白
人、アジア人の子どもを養子にして家族
を営む姿が、どこにでもある日常の風景
として描かれます。

『レッド』(マイケル・ホール作/上田勢
子訳/子どもの未来社)。

実は青色なのに包装紙が間違っ
て赤色だと思い込んでしまっているクレ
ヨンの子どもの物語です。レッドは救急
車もイチゴも描けません。友だちや家
族は心配してアドバイスをしますが、レ
ッドを赤色だと考えているので、どれ
も役に立ちません。彼らの親切心は結
果的にレッドを傷つけています。この
絵本は、レッドが自分を発見する物語
ですが、同時にそれは、わたしたちが
レッドを発見する物語でもあります。

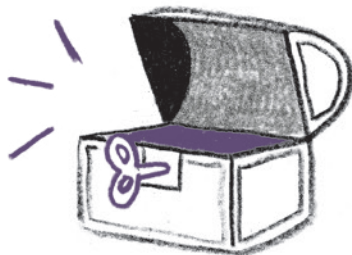


他にも、美しいマーメイドの姿に憧れる男の子を描いた『ジュリアンはマー
メイド』(ジェシカ・ラブ作/横山和江訳/サウザンブックス社)がおすす
めです。

ジェンダー問題を真正面からテーマにしたのが、『女と男のちがいで?』(ブランテルグループ文/ルシ・グティエレス絵/宇野和美訳/あかね書房)。男性優位社会への異議申立てがユーモアたっぷりにいろんな事例で語られています。実はこの作品、1978年に民主化が実現したスペインで刊行されました。古く感じられるとしたらそれは、男女平等が進んだ証ですが、残念ながら日本では今も新しい。

最後に、採り上げたいのは、『男の子でもできること みんなの未来とねがい』(国際NGOプラン・インターナショナル文/金原瑞人訳/西村書店)という写真絵本。女の子たちが自由に生きるためには、男の子たちの意識を変える必要があるため、男の子たちに向けて、彼らの自由さ、可能性の高さを語り、翻って女の子は? と問いかけていきます。

なかなか変わらない社会の規範を無自覚にそのままなぞってる作品はいまでも多く存在します。それを是正するためには意識的な作品が必要であり、これらはそれに応えているのです。



わたしの「体＝命」を生きるあなたへGIFT



友田尋子（甲南女子大学看護リハビリテーション学部看護学科小児看護学、大学院女性健康看護学 教授）

専門分野は小児看護学。主な研究テーマは「DVと子どもの虐待に対する研究」。著書『暴力被害者と出会うあなたへ DVと看護』医学書院／共著書『ドメスティックバイオレンスへの視点』朱鷺書房、『親密な人間関係のための臨床心理学』金子書院／訳書『保健医療のためのDV対応トレーニングマニュアル』解放出版社など多数。

9 人智の及ばない宇宙の法則によって、光合成を可能にする微生物が出現し、地表大気に酸素が増えることで呼吸作用のできる植物と動物が出現、DNAの塩基配列によって、私たちの「体＝命」は誕生した。連綿と続く生殖の営みは、男と女の間に個体発生し、命は紡がれていく。この個体発生の初期には染色体の組み合わせに関係なく女、男どちらにも分化できる能力を持っている。

つまり、私たちは遺伝的染色体による性の決定に次いで、生殖腺の性分化、脳の性分化、身体の性分化より決定づけられた性別をもって、出生後にたまたまこの「体＝命」で私を生きる。授かった「体＝命」を当たり前前に生きることができたらどれほど幸福だろう。



漫画編 「ベルサイユのばら」

池田理代子著／全5巻／集英社文庫

主人公のオスカルは、男装の麗人と称され社会で働いた女である。

オスカルのように男装をせずとも堂々と男と対等に働くことができる時代となったが、未だ女らしさを失ったと誹謗中傷する社会と闘う現代女性の姿はオスカルの時代と変わってはいない。悩みながら生きている現代女性に寄り添いともに生きるオスカルは力強い伴走者であり、雄々しいオスカルから勇気づけられることであろう。男や子どものために女は減私して生きること、それこそが女の生き方、女の幸せという呪いが散在している。

ローブ・ア・ラ・フランセーズ*の衣装には思わずうっとりしてしまい、呪いを飲み込みそうになるが、要注意だ。

絵本編 「ジェンダー・フリーの絵本」

全6巻／大月書店

大人になって、体験して、ジェンダーバイアスはこういうことかと気づくことが多い。遺伝子に導かれて偶然にその性別を生きることになっただけであり、与えられた命を当たり前前に生きるために、「性（体＝命）＝ジェンダー」を知るとどれほど世の中は生きやすいことだろう。それを体現しているのがこの

絵本である。

与えられた命を、それぞれ一人ひとりちがって当たり前を知り、生きていくことを自分自身にしていく作業を子どもから大人に向かうとき、自由で豊かな感性を育むことこそが、ジェンダー枠を超越した声明への畏敬だと実感することができる。子どもとともに学びなおし、見つめなおし、未来を拓く時間になることだろう。

6巻にはもっと知りたい人への参考資料や図書が紹介されており、次世代の子どもたちへ未来の世界を切り拓いていくことができるように、この絵本を読み解いていく技も書かれている優れものである。

映画編

「ブリット＝マリーの幸せなひとりだち」

フレドリック・バックマン原作／ツヴァ・ノヴォトニー監督／2020／スウェーデン

「人生をどのように生きるか」と眩く63歳のマリーは、信じ込まされてきたステレオタイプの主婦像から戸惑いながら自分探求するという、挫折の繰り返しと何気ない出来事と風景が織りなし、見終わった後にマリーの応援者になれる作品である。

10代の子どもが、人生は終わったと思いついでいるマリーに「半分しか生きていない」と反発する場面は思い出ししても勇気が湧いてくる。静かに目覚めていくマリーの姿から、クララ・ピンガムとローラ・リーディ著

書『Class Action: The Story of Lois Jensen and the Landmark Case That Changed Sexual Harassment Law』をもとにした映画「スタンドアップ」(ニキ・カーロ監督/2005/アメリカ)を思い出す。

暴力を振るう夫に耐えかねて子どもをつれて故郷に戻ったジョージに母親は暴力くらい我慢してよりを戻せと哀願。男社会の炭鉱で働き始めるが男たちは執拗な嫌がらせを、耐えかねたジョージは世界初のセクハラ訴訟を起こす。戦うことに躊躇する女たちが男社会からの圧力に怯えていく姿はこちらまで恐怖を覚える。裁判ではジョージの過去の男性経験、特に高校時代にレイプされ、その結果生まれた子どものことが明かされていく卑劣な方法を容認する裁判所も男社会。裁判を傍聴していた同僚女性のみならず男たちもが味方し、一人二人と立つ姿は凛々しく雄々しく、私は号泣した。

マリーの「一日ずつ」と変容していく姿も凛々しく雄々しく、私は微笑した。どちらも私の「体＝命」を生きるオスカルと同様に、女たちの力強い伴走者だ。

※ローブ・ア・ラ・フランセーズ：

宮廷文化「ロココ」が開いた18世紀フランスの典型的な盛装用女性服。衣服が大変革を迎えるフランス革命まで着用された。ガウン、ベティコート、装飾胸当て、背中 of 大きな襷から成る。贅沢で装飾的な絹織物に、レース、リボン、造花など過剰なほど装飾が附加されている。

参考：公益財団法人 京都服飾文化研究財団
The Kyoto Costume Institute



いつだって今が歴史の最先端



野中モモ（翻訳者・ライター）

ZINE、ミニコミ誌、アーティストブックなど多種多様なインディペンデント・パブリッシングを扱う小さなオンラインショップ『Lilmag』の店主。

著書『デヴィッド・ボウイ 変幻するカルト・スター』筑摩書房、『野中モモの「ZINE」小さなわたしのメディアを作る』晶文社／訳書『飢える私 ままならない心と体』亜紀書房、『世界を変えた50人の女性科学者たち』創元社／編著『日本のZINEについて知ってることすべて』誠文堂新光社など多数。

『説教したがる男たち』

レベッカ・ソルニット著／ハーン小路恭子訳／左右社

1970年代の前半、日本における第二次ベビーブームがピークを迎えた年に生まれた私は、「ネットの無い日常」を覚えている世代だ。これまで生きてきた数十年の情報通信技術の進化はめざましく、自分を取り巻くメディア環境がこんなにも劇的に変わったことに改めて驚いてしまう。20世紀の終わり近くまで、直接会って話したりできない人に自分の思いを伝えたいと思ったら、マスコミ・出版関係者の目とまって場を与えてもらうか、そうでなければ自主的にミニコミや同人誌（英語ではZINE）を作って頒布する地道な作業が必要だった。そして有力なメディア企業で要職に就くことができる人は圧倒的に男性多数だったから、女性の声は小さくされ、歪められ、消されてしまいがちだったのだと思う。たとえ男性たちに悪気はなくても、結果的に。

現在では、性別を問わずたくさんの人々がネットを利用して気軽に「世界に発信」するようになった。誰もが日常的にネットにアクセスできるわけではないという事実を決して忘れてはいけないけれど、それでも以前に比べたら大きな前進だ。既存のメディアでは軽視されがちだった人々の声が、広く遠くま

で届く可能性が拓かれたのだから。喜びも悲しみも困りごともある、まずは「ある」ことが認められなければ、その先へは進めない。

アメリカ合衆国の作家・歴史家・アクティビストであるレベッカ・ソルニットは、このように「公的な言論空間」のありかたが急速に変わっていく時代に、歴史とフィールドワークを踏まえて時宜を得た鋭い視点を提示してきた書き手である。これまで日本にも『災害ユートピア なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』（高月園子訳／亜紀書房）、『ウォークス 歩くことと精神史』（東辻賢治郎訳／左右社）など、さまざまなテーマの著作が紹介されてきた。そんな幅広い関心と知識をもち、いま何が起きているかにも目を配ってきたソルニットが、「女性が語ること」の困難について綴っているエッセイ集が『説教したがる男たち』だ。彼女はここで、自ら声をあげる女性たちが歴史上いかに不当な扱いを受けてきたかに注目を促し、共に変化を起こそうと読者に呼びかけている。

ここに収録されている9本のエッセイのうち最も古い表題作は、2008年にブログで発表されて大きな反響を呼んだものだ。それは、あるパーティでソルニットと女友たち



が年上の男性に声を掛けられた際の体験談から始まる。どんな本を書いているのか尋ねられたソルニットは、その時点での最新作だった『影の河 エドワード・マイブリッジとテクノロジーの西部』に話を絞ることにして、この19世紀の写真家の名前を出した。すると男は、「今年出たばかりのマイブリッジ関連のとても重要な本を知っているかね」と、彼女を遮って話し始めたのだ。彼はソルニットの友だちが「それ、彼女の本ですけど」と割って入ってもおかまいなしで、おそらく実際に読むではおらず2~3ヵ月前に新聞の書評で見ただけの本について語り続けた。彼の頭には目の前にいるソルニットが件の本の著者かもしれないという考えが浮かばなかったのだ。おそらく彼女が自分より年下の女性であるという理由で。

このエッセイをめぐるネット上の議論から「マン(男性)」と「エクスプレイン(説明・解説・説教)」を組み合わせた「マンスプレイング」という語が生まれた。これは男性が「女性は自分より知識が無い・わかっていない」と思い込み、上位に立って教える授けようとする行為を指す言葉として人口に膾炙(世の人々の評判になって知れ渡ること)し、「ニューヨーク・タイムズ」の2010年度の「今年という言葉」に選出されるまでになった。ソルニットは「『マンスプレイング』だと、説教したがるのは男の内在的な欠陥だと強調しているような感じがする。私が言いたいのはあくまで、説明できもしないことを

したがったり、人の話を聞かない男たちもいる、ということ」と本書の「後日譚」で述べて問題の単純化を警戒しているのだが、これだけ広まったのはそれが多くの人にとって身に覚えがある経験でありピンとくる言葉だったということだろう。

ソルニットは、このような女性を下に見て耳を傾けようとしめない態度は現代文化に深く埋め込まれた差別意識のあらわれであり、一つひとつはささいなことでもより深刻な暴力につながっているのだと指摘する。そして、ごく個人的な体験を世間を騒がす事件や時事問題に接続し、さらには20世紀前半の作家ヴァージニア・ウルフの言葉や、真実を伝えても誰にも信じてもらえない呪いをかけられたギリシア神話のトロイの王女カサンドラなども参照してみせる。その語りは時間と空間を自由に行き来し、ぐっと寄り添ったり引いてみたりできる高機能のスクープのよう。これまでの長い歴史の積み重ねを透視することで、これから先の未来は拓かれているのだと感じさせる。つまり今ここが最先端であり、次はあなたが語る番、と背中を押してくれる本なのだ。



主観的な事柄を一般化してくれる 白書「男女共同参画白書」

内閣府男女共同参画局

白書とは「政府がある方面について、その現状の分析と将来の展望をまとめた現状報告書」(岩波国語辞典)。

2020年版の男女共同参画白書の特集は「『家事・育児・介護』と『仕事』のバランス～個人は、家庭は、社会はどう向き合っていくか」。女性が「家事・育児・介護」の多くを担い「仕事」もしている働き過ぎの現状から、男性が主体的に家庭責任を果すことが「ますます重要になっている」と謳っています。

「介護」の章をみましょう。「同居の主たる介護者の推移」、1998年と2016年を比較すると、「子の配偶者(女性)」(＝嫁)は11.1ポイント減り(27.4%から16.3%)、息子は10.8ポイント増えています(6.4%から17.2%)。一方、妻は26.6%から27.4%、娘15.5%から19.9%、夫11.3%から15.6%といずれも微増しており、「嫁による介護の急激な減少」から、家族関係や家族観が変化したことがわかります。

最近、増えたといわれる男性介護者ですが、「娘19.9%」vs「息子17.2%」、「妻27.4%」vs「夫15.6%」と依然、女性が多い状況は変わっていません。

「子の配偶者」に関しては、「子の配偶者(女性)

16.3%」はありますが、「子の配偶者(男性)」(＝婿)の項目がありません。「婿」は「調査対象ではない」という考えに基づいて調査がなされているのです。まさにこれがジェンダー問題です。

そのほかにも、無償労働時間の男女比率の国際比較では、男性1に対して、OECD(経済協力開発機構)の平均は女性1.9倍ですが、日本の女性はなんと5.5倍! 男女差断トツ! 改めて白書で「男性の家庭責任」を取り上げなければならないほどに日本は性別役割分業社会なのです。

白書は、主観的な事柄を一般化し、社会の問題として明らかにするために活用できる資料です。「女性労働の分析」、「女性白書」、「子ども白書」、「保育白書」、「厚生労働白書」、「人間開発報告書」も所蔵しています。

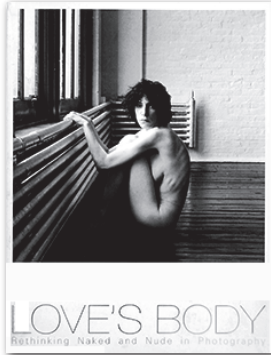
撮る側と撮られる側の「写らない関係」が 写り込み「その作品」になる 図録「ラブズ・ボディ ノード写真の 近現代」

笠原美智子ほか編/朝日新聞社

ウェブの図書・資料コーナーは小さいですが、写真集なども所蔵しています。その中から、東京都写真美術館で1998年に開催された写真展の図録を紹介します。まずは学芸員の解説「新しい身体表現が出現した1970年代以降の作品に焦点をあて、調和のとれた美しい女性の身体を男性のエロスや性幻想の表象として描く従来のヌード写真を批判的に検証し、ヌードの範疇を越えて、生と死と性を巡る広汎で複雑な身体表現を探る試みであった」



何？「ヌードの範疇を越えた生と死と性を巡る広汎で複雑な身体表現」って何だ？と思った方はぜひ手に取ってください。エイズで死を前にした恋人、性



別の境界を混乱させる作品…。だれが「だれのどの身体」にどのような意味づけをしてきたのか。いや、意味づけることを許されてきたのか。そもそも「身体」とは何か？身体は単に「からだ」として存在している“モノ”ではない、ということをも「生と死と性」を通して、この写真展は明らかにしています。

しかし、身体の新たな表象だとしても作者の意図を離れ、従来の「エロスや性幻想の表象としてのヌード」として鑑賞されるリスクは避けられません。だとしても、この写真展はこれからも語り継ぐに値する表象を提起しています。

女性の活動に関する情報収集はセンターの重要な役割 ミニコミ誌「ファイト・バック」

性暴力を許さない女の会ニュースレター

性暴力を許さない女の会は、1988年痴漢を注意した女性が逆恨みをされて強姦被害にあった「地下鉄御堂筋事件」をきっかけに結成されました。当時、「痴漢は犯罪だ」というポスターを張るなどの痴漢対策を鉄道会社に要求して断られたという逸話があります。

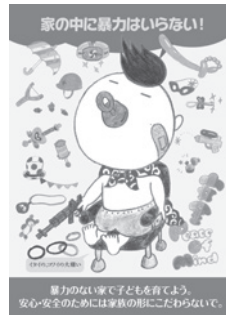
女性が感じる「理不尽」は個人的な問題として、歴史の主流から排除されてきました。しかし「個人的なことは、社会的なこと」と、女性たちは「じぶんごと」を決して軽んじることなく、むしろ、そこにある問題を掘り下げる活動を展開してきました。ミニコミ誌を作ることで、訴え、仲間を増やし、社会を変えてきたのです。女性の運動はミニコミ誌を抜きには語れないといっても過言ではありません。

歴史に名を残す偉人は男性ばかりで、まるで女性はいなかったかのような歴史観と同様に、女性の運動を「埋もれさせてはならない」という明確な目的に基づいて、男女共同参画センターはミニコミ誌を収集しています。

活動を終えたり、紙媒体は作らなくなった団体もありますが、以下の団体の情報誌も揃えています。

いこる（働く女性）、しんぐるまざあず・フォーラム（シングルマザー）、アジア自立プロジェクト（外国人女性）、ミリネ通信（在日・被差別部落の女性）、れ組通信（レスピアン）、W・S・ひょうご（DVシェルター）





「男女共同参画パネル」貸出します

- *貸出先：自治体、市民グループ、企業などの団体／非営利目的の展示に限る
- *費用：無料。ただし経費（展示に係る費用、送料等）はご負担ください。
- *貸出期間：最長1カ月程度
- *詳細は、ウェブまでお問い合わせください。

ウェブ

【図書・資料コーナー】

男女共同参画に関する情報を収集し、提供しています

- 貸出：月～土 10:00～17:15（資料整理期間は除く）
- 図書・雑誌5冊、DVD・VHS1本…2週間

【女性のための相談室】

- 電話相談：0798-64-9499／月・木
10:00～16:00／一人30分程度
- 面接相談：要予約／月・火・水・木・土
10:00～16:30／一人50分
- 法律相談：要予約／第3金
14:00～17:00／一人30分

【女性のためのチャレンジ相談】

再就職・起業・資格取得や地域貢献の実現など、キャリアコンサルタントによる相談

- 面接相談：要予約／一人50分
奇数月…第3水／13:00～16:00
偶数月…第2金／10:00～13:00

【性的マイノリティ相談】

- 電話相談：0798-68-6720
第2土（休日・祝日の場合も実施）
10:00～13:00／一人30分程度

- ※予約電話：0798-64-9498（月～土／9:00～17:15）
- ※託児付き
- ※「性的マイノリティ相談」以外の相談は、休日・祝日・12月29日～1月3日は除く

おすすめの図書・映像作品

For you もっと本を！ もっと映画を！

発行：西宮市男女共同参画センター ウェーブ
〒663-8204 西宮市高松町4-8
プレラにしのみや4F
TEL.0798-64-9495 FAX.0798-64-9496
https://www.nishi.or.jp/bunka/danjokyodosa_nkaku/index.html

発行日：令和3（2021）年3月
イラスト：宮武小鈴

